

各 関 係 機 関 団 体 の 長 員 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和 5 年度病害虫発生予報第 7 号 (10 月) について

このことについて、病害虫発生予報第 7 号を発表したので送付します。

予報第 7 号

果樹カメムシの発生動向に注意しましょう

本年は、一部の地域の予察灯等で、多数の果樹カメムシ類が確認されています。本虫は、発生量とほ場での被害量は必ずしも一致しませんが、注意が必要です。カメムシ成虫の活動が活発になる日没時期のほ場の巡回や、被害果の発生量を調査し、必要に応じた防除を実施して下さい。また、当所ホームページ「病害虫の発生動向」も、随時ご参照ください。



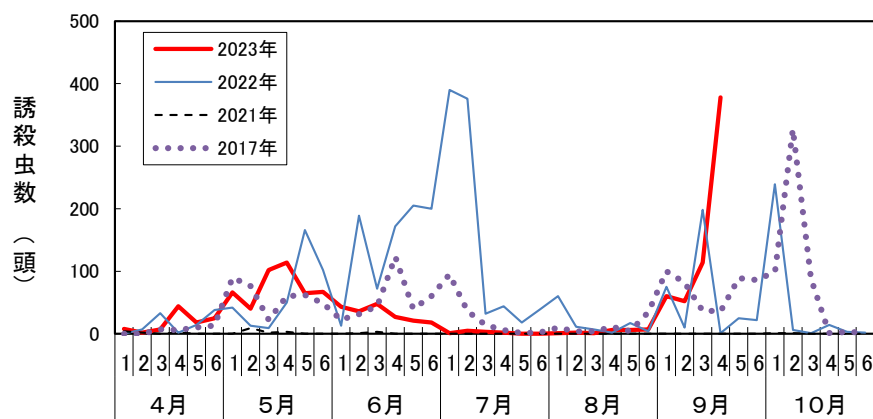
写真1 チャバネアオカメムシ



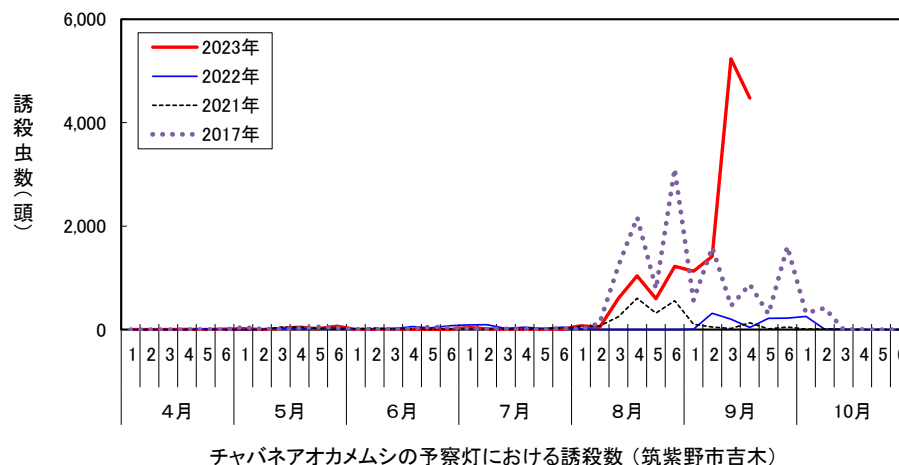
写真2 カキの被害果



写真3 9月21日予察灯捕殺量(黒木)



チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(筑紫野市吉木)



※ 2017 年はチャバネアオカメムシの越冬虫数が 2023 年と同等の年（2017 年：1.0 頭/㎡、2023 年：1.1 頭/㎡）

10 月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現 況 (発生量)	10 月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	やや多 並	やや多 並	やや多 並
かんきつ	ミカンハダニ	並	並	並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	並 少	並 やや少	やや多 やや少
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多 ³⁾	— ³⁾	多 ³⁾
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	並	やや多	多
イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 並 並	並 並 並	並 並 並
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	やや多 やや多 並 ⁴⁾	やや多 やや多 やや多 ⁴⁾	やや多 やや多 やや多

注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去 10 年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。

注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注 3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。

注 4) 野菜共通・コナジラミ類は、2018 年から調査を実施しているため、平年は過去 5 年間としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



○X（旧 Twitter）で定期情報や警報等の発出についてお知らせしています。

X（旧 Twitter）の本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②



<予想される向こう1か月の天候（令和5年9月23日～10月22日）>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に期間の前半はかなり高くなる見込みです。期間の前半を中心に高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

（福岡管区气象台 令和5年9月21日発表1か月予報より抜粋）

【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 9月5半旬の調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

10株当たり払落とし幼虫数 6.7頭（平年 6.2頭、前年 2.3頭）

発生ほ場率 91.7%（平年 61.4%、前年 41.7%）

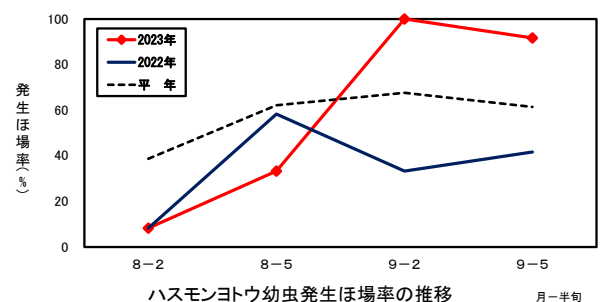
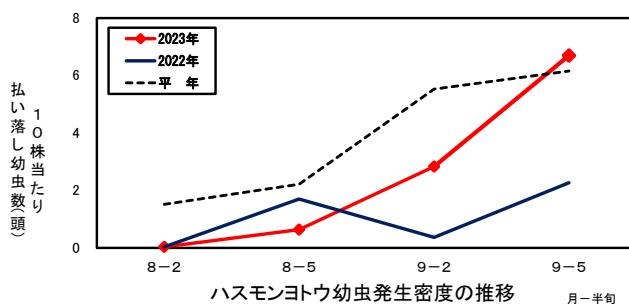
イ 9月5半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年より多かった（+）。

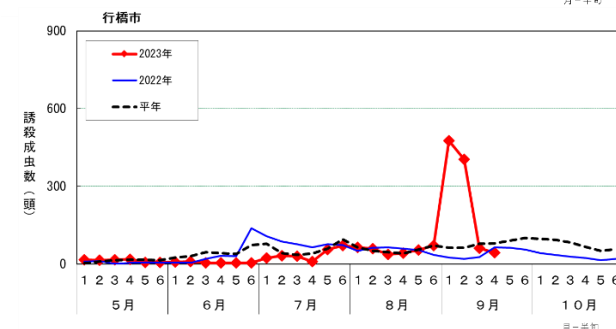
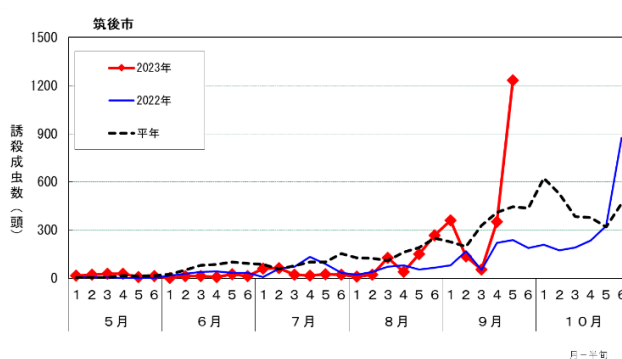
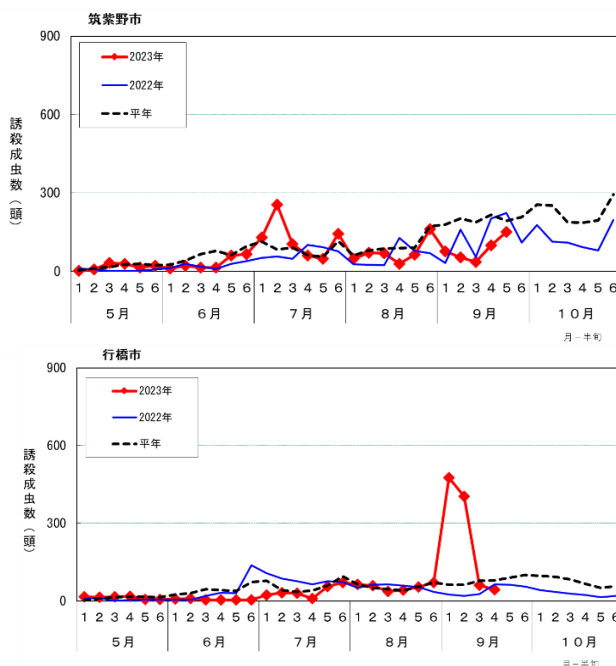
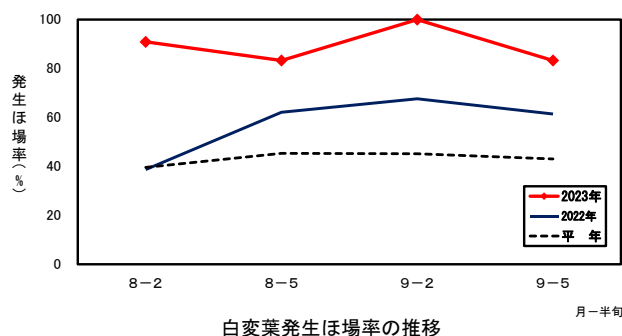
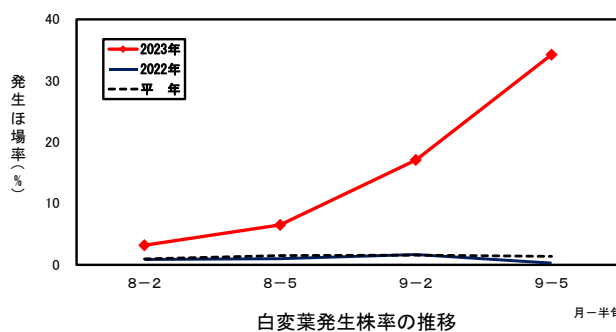
白変葉発生株率 34.3%（平年 1.4%、前年 0.3%）

発生ほ場率 83.3%（平年 43.1%、前年 36.4%）

ウ 9月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数はやや多で推移した（±～+）。

エ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。





フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺虫数の推移

(3) 防除上の注意

ア ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。

ウ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、必ずほ場で発生状況を確認し、防除する。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。(以下の害虫についても同様) <<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>

オ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

カ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p11の内容を確認の上、農薬の使用基準(使用時期、使用回数等)を遵守し、周辺ほ場への飛散防止対策を講ずる(以下の病害虫についても同じ)。

2 吸蜜性カメムシ類

(1) 予報の内容

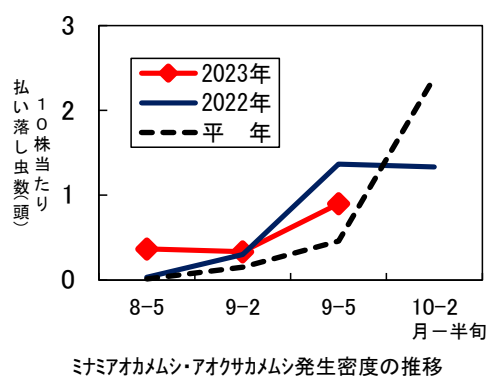
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5カ所の予察灯における9月1半月～9月5半月の誘殺虫数は平年よりやや多かった(±～+)。

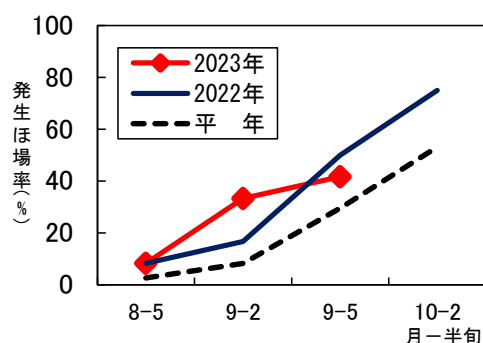
131頭(平年85頭、前年147頭)

イ 9月5半月調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

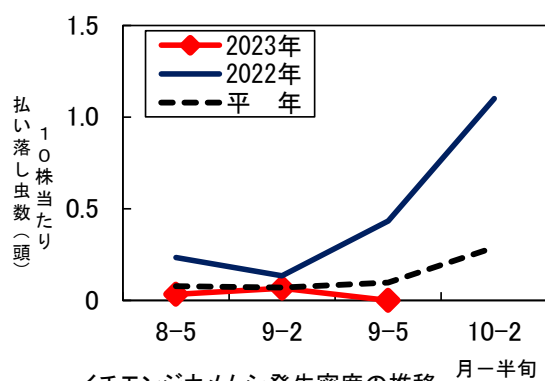


- ・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ
10株当たり払い落とし虫数 0.9頭
(平年 0.5頭、前年 1.4頭)
発生ほ場率 41.7% (平年 29.6%、前年 50.0%)
- ・イチモンジカメムシ
10株当たり払い落とし虫数 0頭 (平年 0.1頭、前年 0.4頭)
発生ほ場率 0% (平年 11.9%、前年 41.7%)
- ・ホソヘリカメムシ
10株当たり払い落とし虫数 0.03頭 (平年 0.1頭、前年 0.4頭)
発生ほ場率 8.3% (平年 17.2%、前年 33.3%)

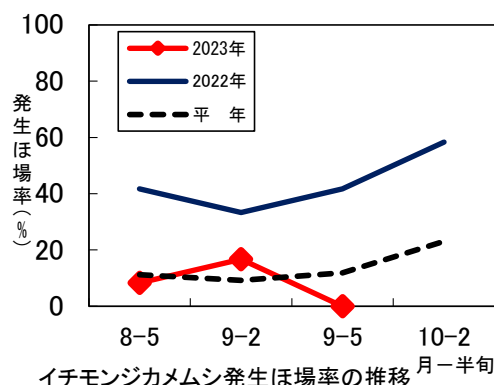
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



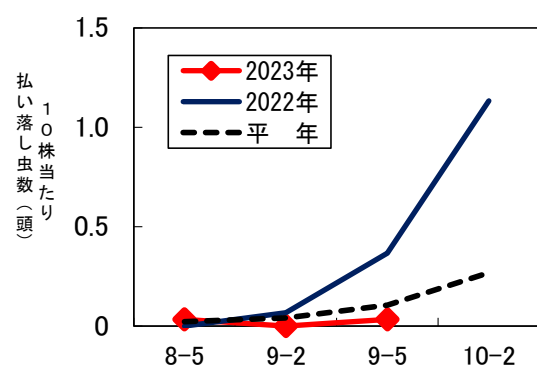
ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ発生ほ場率の推移



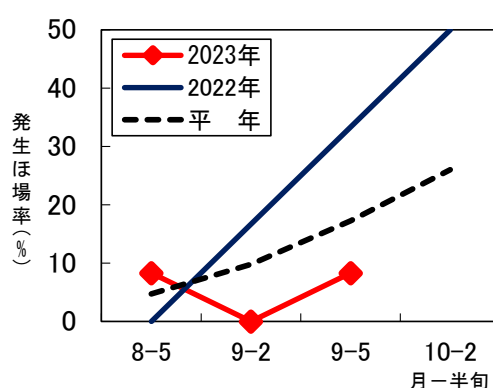
イチモンジカメムシ発生密度の推移



イチモンジカメムシ発生ほ場率の推移



ホソヘリカメムシ発生密度の推移



ホソヘリカメムシ発生ほ場率の推移

(3) 防除上の注意

- ア 吸実性カメムシ類は、低密度でも品質に及ぼす影響は大きく、特に幼莢期から子実肥大期にかけての加害が著しい。そのため、開花期30日前後(9月中~下旬)に防除を行い、発生が継続する場合は、その7~10日後に2回目の防除を行う。
- イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるよう丁寧に散布する。
- ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- エ ミナミアオカメムシは例年9月下旬~10月上旬にかけて発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 1.4% (平年 3.5%、前年 7.6%)

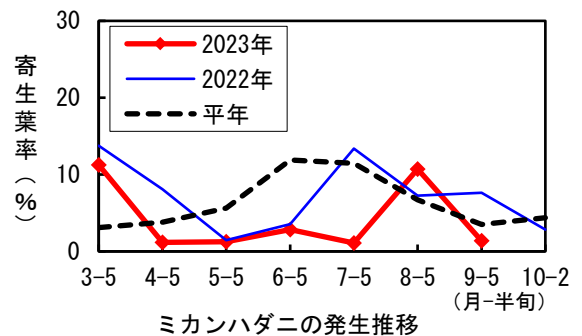
発生ほ場率 18.2% (平年 36.3%、前年 45.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.3% (平年 0.4%、前年 0.03%)

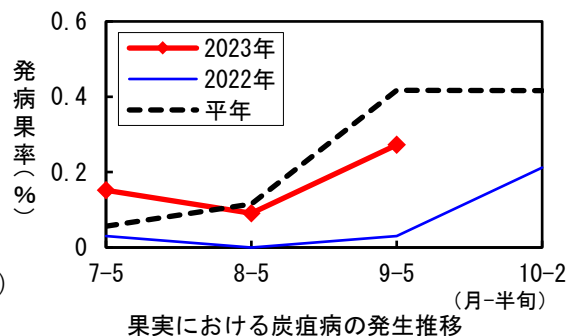
発生ほ場率 36.4% (平年 26.8%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では薬剤防除を実施する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生果率 2.5% (平年 12.3%、前年 5.7%)

発生ほ場率 54.5% (平年 86.1%、前年 81.8%)

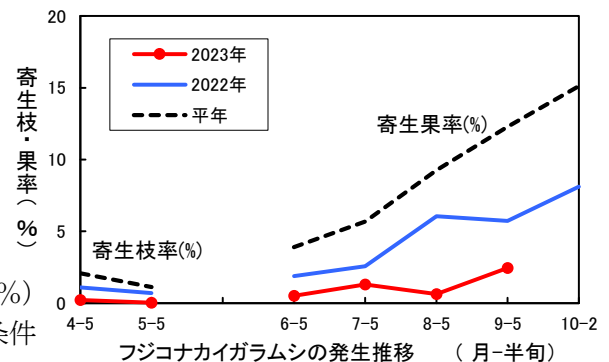
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、カイガラムシ類の

天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシに効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ）】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月4半旬～9月4半旬までの予察灯による誘殺成虫数は前年より多かった(+)。

イ 8月4半旬～9月4半旬までのフェロモントラップによる誘殺成虫数は前年より多かった(+).

予察灯 (5ヶ所) 平均：5,396頭 (前年813頭)

フェロモントラップ (4ヶ所) 平均：211頭 (前年81頭)

※ア・イのグラフはp 1～2（トピックス）参照

ウ 9月2半旬におけるヒノキ球果ビーティングによる果樹カメムシ類の捕獲成幼虫数は、前年並で（±）、成虫比率も前年並であった（±）。

平均捕獲成幼虫数：9.7頭（前年 7.7頭）

成虫比率：86.0%（前年 85.9%）

エ 9月2半旬のヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数（15地点平均）は前年（12地点平均）より少なく、ヒノキからの離脱の目安である25本/球果に至っていない状況であった（－）。

口針鞘数：9.3本（前年 18.3本）

また、9月5半旬に、果樹産地を中心に5地点について追加調査を行った結果、ヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数は17.8本/球果であった（9月2半旬の5地点平均は8.3本/球果）（＋）。

オ 9月5半旬調査の結果、カキでの被害果率は前年よりやや少なかった（－～±）。

カキ（9月5半旬） 被害果率 0.9%（前年 2.0%）

発生ほ場率 45.5%（前年 81.8%）

カ 向こう1か月の気象予報では、やや被害が多発しやすい条件となっている（±～＋）。

（3）防除上注意すべき事項

誘殺状況及び成虫比率・口針鞘数から、地域によってはヒノキから離脱し始めていると考えられる。

ア 果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害の発生は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

エ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

【野菜：冬春ナス】

1 ミナミキイロアザミウマ

（1）予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

（2）予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生葉率 4.5%（平年 2.9%、前年 0.4%）

発生ほ場率 33.3%（平年 29.4%、前年 14.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（3）防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

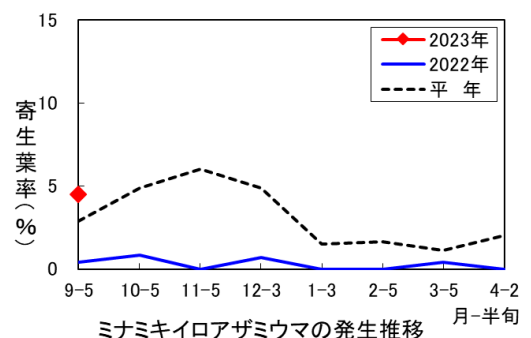
イ 防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤感受性が低下しているため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
＜県ホームページ掲載の「令和5年度版病害虫・雑草防除の手引き」－「IPMの推進」－「冬春ナスのIPMマニュアル」参照＞

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/691110_61797151_misc.pdf



【野菜：イチゴ】

1 うどんこ病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

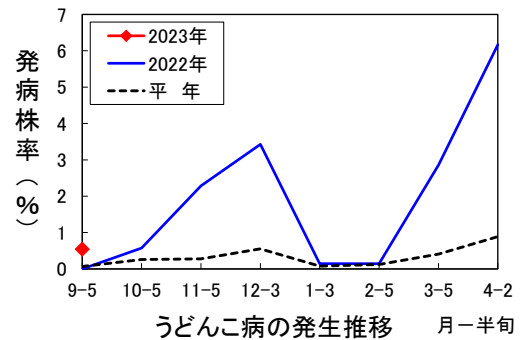
発病株率 0.5%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉は早めに除去する。薬剤防除は下葉かき後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆前までを重点的に防除を行う。薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

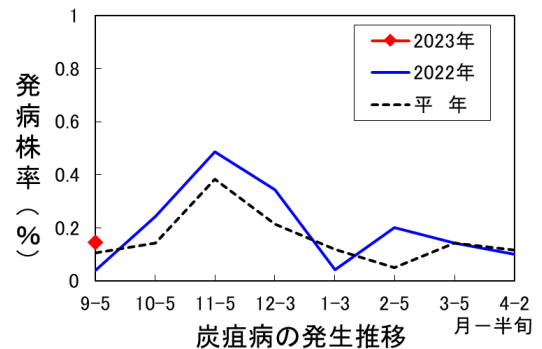
発病株率 0.1%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。

イ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 0.2%（平年 1.9%、前年 0.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

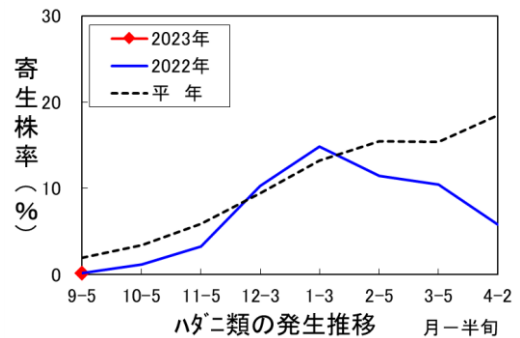
ア ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆までを重点的に防除を行い、初期密度を低下させる。
イ 薬剤感受性が低下しやすいので、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

また、ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。防除は適葉後に行うと効果的である。

ウ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
＜県ホームページ掲載の「令和5年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照＞

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/691110_61797145_misc.pdf

エ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。



【野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年よりやや多く推移した（±～+）（「普通作物：大豆」の項参照）。

- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。
- （3）防除上注意すべき事項
- ア 「普通作物：大豆」の項参照。
- イ 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。

2 オオタバコガ

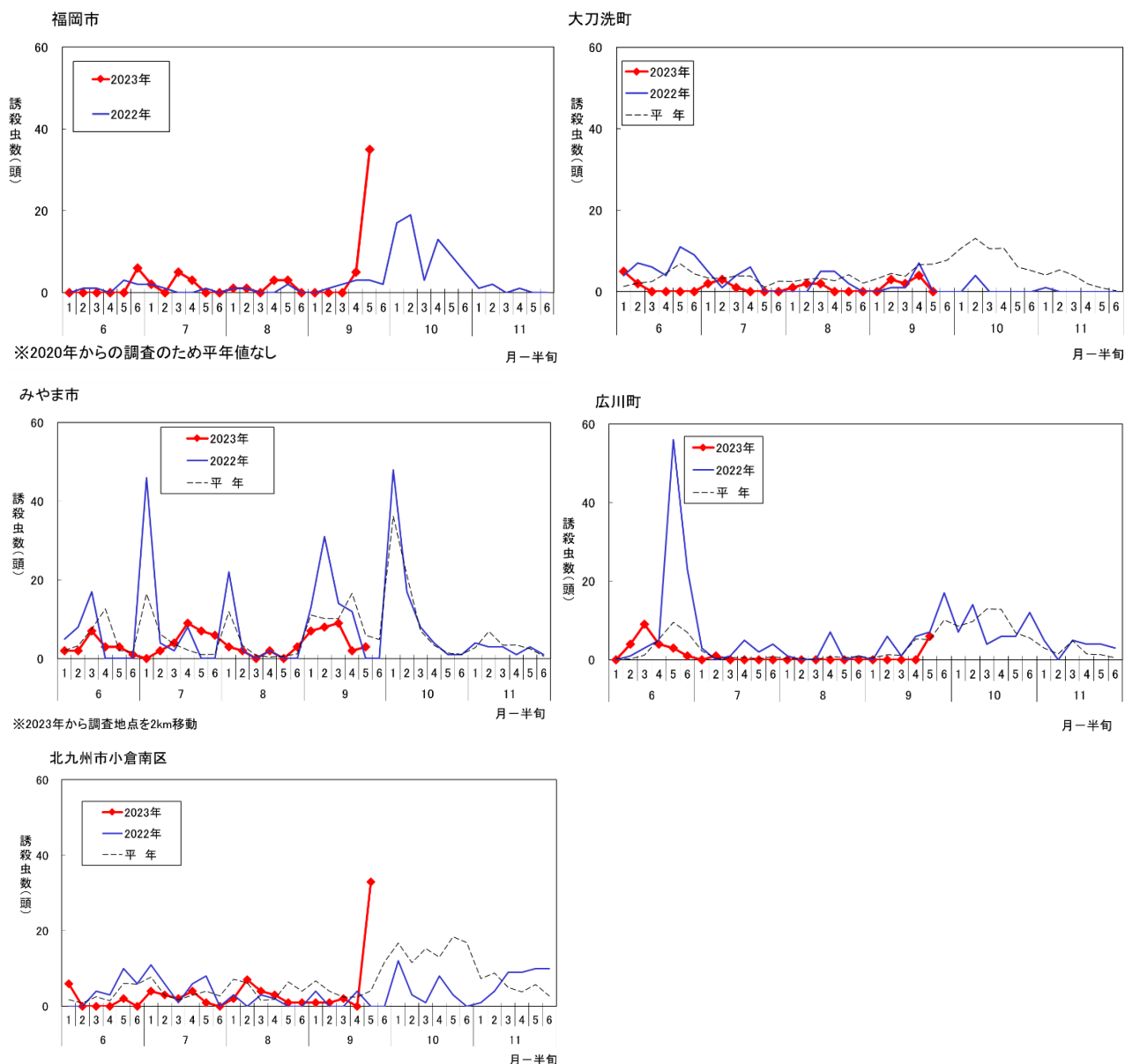
（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 9月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、地域により差はあるが、平年よりやや多く推移した（±～+）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺虫数の推移

（3）防除上注意すべき事項

ア ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。

ウ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから4日目頃であるが、地域に

- よって誘殺数に差があるため、必ずほ場で発生状況を確認し、防除する。
- エ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。
- オ 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。

3 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

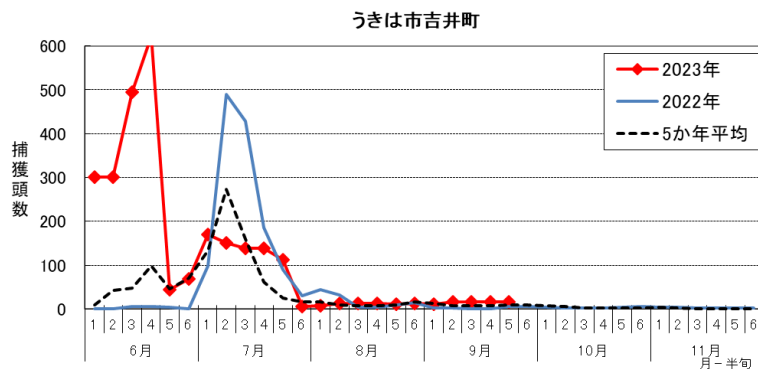
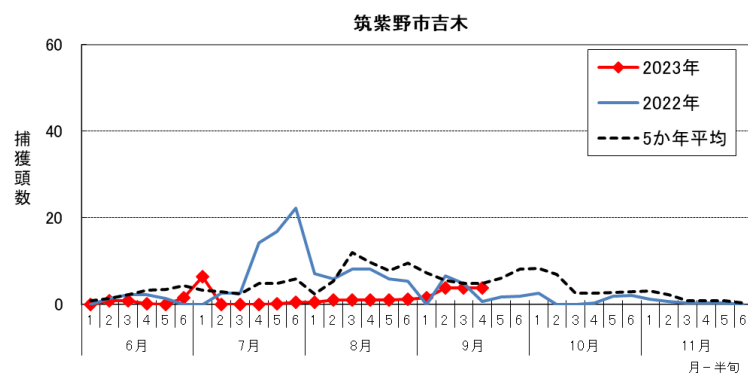
ア 9月の粘着板トラップにおける捕獲虫数は平年並で推移した（±）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 施設の開口部に目合い0.4mm以下防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。

イ 黄色粘着シートの設置等により発生状況を把握し、発生初期の防除に努める。



黄色粘着板によるコナジラミ類の誘殺虫数の推移

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

（例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる）

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。